

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 共同研究発表会開催記録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002700">https://doi.org/10.15084/00002700</a>

## 共同研究発表会開催記録

共同研究期間（平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月）および研究取りまとめ期間（平成 24 年 9 月～平成 25 年 3 月）の期間中、以下の公開の共同研究発表会を開催した。

1. 公開研究発表会 平成 22 年（2010 年） 3 月 15 日（月）14:00-16:30

国立国語研究所 多目的室

(1) 「共同研究大規模方言データによる多角的分析の目的と概要」（熊谷康雄）

【概要】国立国語研究所では全国の方言分布が見渡せる『日本言語地図』や全国規模の方言談話の録音資料「各地方言収集緊急調査」などの資料の電子化を進めてきた。『方言文法全国地図』では作成段階から電子化されている。しかし、このような大規模な方言データを本格的に駆使した研究は今後に期待するところが大きい。本研究では、これら基盤となるデータを中心としつつ、計量的方言研究、言語地理学、日本語史、談話研究などの共同研究者が実践的なデータの分析を通して多角的に研究を行い、データの持つ可能性を発掘、新たな知見の獲得や方法の開発を目指す。この研究の目的、概要について説明し、事例として『日本言語地図』データベース構築の概要と研究利用への展開について示した。また、全国規模の方言分布データによる研究として、言語地図のデータに基づき地点間の方言の類似度をネットワークとして表示、分析する方言区画のためのネットワーク法に触れた。

(2) 「消えゆく日本語方言の記録調査－『日本言語地図』との関連で－」

（小林隆，澤村美幸〔東北大学大学院生・日本学術振興会特別研究員（当時）〕）

【概要】プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」は、特に『日本言語地図』を構成する大量のデータを整備し、さまざまな角度から研究に役立てようとするものである。この「大規模方言データ」という点では、私たちの研究室（東北大学方言研究センター）が主体となって取り組んでいる調査も該当するのでここでその概要を紹介した。この調査は、語彙項目を中心とする全国的な分布調査であるという点で、『日本言語地図』との関係が深い。例えば、『日本言語地図』の「目」という項目に対して、新たに「目玉」や「ひとみ」の項目を調査することで、「マナコ」という語の意味の分布や歴史についてより詳しく考察することが可能になった。

(3) 「分布の類型と孤例」（沢木幹栄）

【概要】大規模データを使った研究の例として「孤例の研究」を取り上げる。孤例の研究は徳川宗賢に始まる。沢木はそれを引き継いで、コンピューターを使い、『日

本言語地図』の 27 項目という大規模データを対象に孤例の出現の仕方 についての研究を行った。地点ごとの孤例の生産性という観点では、27 項目のうち、一回しか孤例がない地点は全体の大多数を占め、孤例の出現数が多くなる につれ、その出現数を持つ地点の数が急激に減るという傾向が見られる。また、孤例の多い地点を地図上にプロットすると、琉球地域にそのような地点が多く見られるなど地理的な偏在が認められる。孤例の研究は大規模データをそのまま活かすという点で有望なものであり、また、まだまだ発展する余地のあるものだと考えられる。非常にコンピューターに乗りやすい研究手法であるということも強調しておきたい。語形の共出現による地点間の距離を測ることによって地点同士 の構造を探ることも提案したい。

2. 公開研究発表会 平成 22 年（2010 年）7 月 17 日（土） 14:40-16:30  
国立国語研究所 多目的室

(1) 『日本言語地図』による方言分布データの計量的研究の探索（熊谷康雄）

【概要】計量的なアプローチによれば方言分布はどのように捉えられ、取り扱うことができるか、『日本言語地図』のデータを用いた探索的な試みの報告をした。言語地理学的分析において、語の分布の地理的な連続性は分析の基本にあり、言語地図のデータ処理・計量的な研究においも重要である。この分布の連続性の取り扱いのひとつとして、計算機上で、語の分布において地理的に連続した領域を認識し、分割、ラベル付する方法について初期段階の試みの報告をした。『日本言語地図』データベース中の語形を例とし、計量的方言区画のための「ネットワーク法」において地点の隣接関係の近似的表現として用いている Delaunay net（幾何学的な意味において自然な隣接地点同士を結ぶネットワーク）を用い、ネットワーク上で語の分布が連続する領域の分割、ラベリングをする手順と実行結果を示した。また、今後の展開についての見通しのいくつかを述べた。

(2) 『全国方言談話データベース』を用いた表現法の地域差の分析試論（井上文子）

【概要】全国規模の方言データを活用して、地理的分布、形態的変異、使用実態を把握し、社会的属性、場面差、世代差、機能差などの観点から方言間比較をおこなう、日本語方言における表現法の地域差について分析を試みようとしている。表現

法のひとつとして、間投助詞を対象とし、各地方言における間投助詞の多様性について予備的考察を開始した。『方言文法全国地図』に現れる間投助詞の形式を整理し、全国の地理的分布を概観した。間投助詞「ナ」「ノ」「ネ」については、場面による使い分けの一端にも言及した。また、『全国方言談話データベース』の各地点で使われている間投助詞「ナ」「ノ」「ネ」「サ」「ヨ」「ヤ」について、秋田県湯沢市、東京都台東区、奈良県五條市、愛媛県松山市、鹿児島県揖宿郡穎娃町における出現状況を報告した。

3. 公開研究発表会 平成 23 年（2011 年） 3 月 17 日（木） 14:40-16:30 中止

4. 公開研究発表会 平成 23 年（2011 年） 12 月 10 日（土） 13:50-16:40

国立国語研究所 セミナー室

(1) 『日本言語地図』データベースの構築過程とその性格（熊谷康雄）

【概要】データベースの利用・分析にはその性質・特徴を理解しておくことが重要である。『日本言語地図』データベースの構築方法は、資料の保管秩序に基礎を置き、地図の編集や資料の保管法と結びついている。データベース構築のプロセスと構築過程で出会う問題点とその対応から、事例を示しながらデータの性格についての整理を試みた。また、この『日本言語地図』データベースの活用、分析を目的とする参考地図の電子化や地点・被調査者の属性情報等、関連データの電子化の方法についても述べた。基礎図、参考地図は多くの GIS も含めた他システムとのファイル形式の互換性の高いシェープファイルの形式で作成し、これを基にこれまでのプラグインの利用に互換性のあるイラストレータ形式も作成した。これらについて報告するとともに、フリーの GIS ソフトである QGIS 上で道路網と複数回答地点の分布の突き合わせについての初歩的な観察を例示として示した。また、地点の属性データ等の LAJDB 本体への統合に向けて、データベースの見通しを述べた。

(2) 「方言圏論の発展と現代的な位置」（小林隆）

【概要】柳田国男によって提案された「方言圏論」は現在でも方言の成立を解き明かす有効な原理である。しかし、その後、この理論に対する反論や修正案が提出され、さまざまな問題点が検討されてきた。その中で、日本の方言形成についての

議論が繰り返され、方言学の発展が促されてきた。今や、方言圏論は、方言の形成について扱うより大きな研究の枠組みの中でとらえるべき段階に来ている。そのような広義の研究概念を「方言形成論」と名付けることにする。この方言形成論は、近年、研究が活性化しつつあるが、それらの研究に共通するのは、方言圏論的な方言形成を批判的にとらえる問題意識である。この発表では、それらの研究に導かれながら、方言圏論のもつ問題点をあらためて整理し、それが今日、方言形成論の中でどのように深化されてきているかを見ていった。すなわち、現在の方言形成論における方言圏論の位置付けと課題について考えた。

### (3) 「言語解析ソフトを利用した大量方言テキストデータの処理法」 (澤木幹栄)

【概要】日本語解析ソフト茶筌を利用して、標準語対訳付きの方言テキストデータで、感動詞や指示詞などをコンテキスト付きで取り出すことを考えた。標準語テキストに解析ソフトを使うことによって、効率よく特定の品詞や特定の活用形を取り出すことができる。今回の発表では、方言談話資料のデジタルデータから、標準語訳の部分に形態素分析ソフト「茶筌」を適用して、形態素に文法情報を付加したものを作り、そこから大量データを作るという手法について発表を行った。このとき「コマンドプロンプトの利用になれていない研究者にとってハードルが高すぎる」という意見が出、これに対して、visual basicなどでプログラムを書いて、ユーザーインターフェースの改良を図ることを提案した。現在、取りかかり始めたところである。

## 5. 公開研究発表会 平成 24 年 (2012 年) 3 月 19 日 (月) 14:45-15:45 国立国語研究所 多目的室

### (1) 『日本言語地図』データベースの環境を利用した回答語形の分布に関わる観察 (熊谷康雄)

【概要】構築中の『日本言語地図』データベース (発表時 100 項目) の環境を利用した観察事例を報告した。(1) 併用回答の分布: 併用は語の接触, 変化と関わる。併用地点の分布と LAJ 参考図近代道路網との重ね合わせを試行し, 初期の観察で道路網の密なところに併用地点が多く分布する傾向が見えた。多数の項目の集計で, その傾向を探った。(a) 項目別併用地点の地理的分布の例, (b) 55 項目 (整備済で地点数が全調査地点数 2400 にほぼ同じ項目) の集計による各地点の併用項目の

度数の地理的な分布などを示し、今後の分析の見通しを述べた。(2) 凡例語形のモーラ数の分布：LAJの凡例語形のモーラ数を数えるプログラムを作成し、項目毎に、各地点の回答語形のモーラ数を計算（約70項目）し、第一段階として県別の語形のモーラ数の度数分布の形に地理的な分布パターンを示した。凡例語形という制約はあるが、地理的な分布が観察できること述べた。

6. 公開研究発表会 平成24年（2012年）8月25日（土） 10:20-17:20  
東北大学文学部 103 演習室（文学部3号館1階）

(1) 「報告と討論：大規模方言データの利用と研究」

【概要】報告・討論者：沖裕子，小林隆，澤木幹栄，竹田晃子，日高水穂，鏈水兼貴／コメンテータ：佐藤亮一（国語研名誉所員）進行／井上文子，熊谷康雄  
『日本言語地図』データベース（LAJDB）や全国方言談話データベース（DDJD）など、全国規模のデータベースの利用とこのようなデータベースを活用した研究について、異なる分野の研究者の視点から、事例報告と討論を行い大規模方言データの利用と研究について議論した。『日本言語地図』データベースにより『日本言語地図』（LAJ）の半数の項目を用いて孤例の分布状態を示した「全データの半分で行った孤例の研究」（澤木幹栄），『日本言語地図』データベースの項目データと属性データを用い、インフォーマントの年齢差の情報を用いて言語地図上で方言語形の変化を探る試み（鏈水兼貴），全国分布資料や東北方言資料を用いた「東北方言における極限のとりたて助詞サエ」（竹田晃子），全国方言談話データベースを利用し表現法と受話法の方言的特徴について指摘した「大規模自然談話資料の活用可能性」（沖裕子），全国規模で収集された既存の言語資料と『日本言語地図』や『方言文法全国地図』等を比較対照して問題発見を試みた「全国規模の既存の言語資料を用いた方言研究の試み」（日高水穂），大規模方言データという観点から「消えゆく日本語方言の記録調査」のデータを用いた「知られざる地域差を探る：表現法・言語行動，そして発想法」（小林隆）などの報告があり，コメンテータと参加者を交えた討論が行われた。

(2) 『日本言語地図』データベースの構築と計量的探索（熊谷康雄）

【概要】構築を進めている『日本言語地図』データベース（LAJDB）の報告と、『日本言語地図』の計量的分析に向けて現在探索的に行っている事例の中から，併用現

象の分布を中心に以下の報告をした。(1)『日本言語地図』データベースについて原資料、地図情報の全体の電子化、データベース化などの概要を説明した、(2) 3月に報告した2400地点の55項目の併用現象の分布に加えて、地点毎に併称処理が行われたか否かの情報を付加したデータを作成し、地点毎に併用処理の行われた項目数の分布を描き、併用処理の行われた併用回答の分布も合わせて観察できるようにした。併用処理の行われた併用の分布は、併用処理語の『日本言語地図』の併用現象の分布と矛盾せず、その中にはまるような分布を示した。この併用現象の分布について報告した。(3) これまで部分的に『日本言語地図』の3集のみのデータを用いて言語的な類似のネットワーク法による視覚化を試みていたが、『日本言語地図』データベースのデータを用い、併用現象との突き合わせを念頭に整備済みの中から上の併用現象の観察を行ったものと同じ55項目について、ネットワーク法による視覚化を行った。(4) 方言形成のシミュレーションに向けて検討を続けているが、D. Nettleの方言の発生(言語的多様性の発生)に関するシミュレーションの再現と検討のために行ったD. Nettleのシミュレーションの再現の報告をした。

## 7. ワークショップ 平成24年(2012年)12月16日(日) 9:30-17:20

全国町村会館 ホールB (東京都永田町)

### 【概要】

全体説明:「プロジェクトの紹介、データベースの説明など」(熊谷康雄)

報告1:「方言昔話資料にみる語りの地域差—文末形式に着目して」(日高水穂)

報告2:「大規模自然談話資料にみる受話法」(沖裕子)

報告3:「用言準体法の分布と形式(仮題)」(大西拓一郎)

報告4:「『日本語言語地図』にみる動物の鳴き声のオノマトペ」(竹田晃子)

報告5:「全国方言調査から見た感動詞の地域差」(澤村美幸)

報告6:「孤例は特殊な語か」(澤木幹栄)

報告7:「言語地図にみる方言変化・共通語化 LAJDB 編」(鎌水兼貴)

報告8:「LAJDBによる『日本語言語地図』の計量的探索」(熊谷康雄)

報告9:「共通語形の分布と伝播について」(小林隆・熊谷康雄)

コメンテータ:岸江信介(徳島大学), 半沢康(福島大学)

進行:熊谷康雄

共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」は研究の基盤となる大規模方言データの整備、ならびに、データが持つ可能性を引き出す多角的な研究の

実践を通して、ことばの地域差の実態やその形成の解明に寄与する知見の獲得や、方法の開発を目指して来た。この3年間のプロジェクトを踏まえ、『日本言語地図』データベースや全国方言談話データベースをはじめ、全国規模のデータベースの活用・分析の実践の報告と討論を行い、大規模方言データの利用と研究について議論した。構築を推進してきた『日本言語地図』データベースの構築状況と公開についても報告した。データの整備と多角的な研究の実践に関する報告と討論を通して、データが持つ可能性を引き出すことを目指し、ことばの地域差の実態とその分析、資料や研究方法について、報告者、コメンテータ、参加者で議論を行った。

(以上)

以上の他、公開研究発表会と併せて毎回開催した非公開の研究打ち合わせ会でも、参加者全員による報告と全員によるディスカッションが行われた。